
居場所。

庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居場所。

【Nコード】

N0909BA

【作者名】

庵

【あらすじ】

小学時代のほとんどを一緒に過ごしてきた庵と拓馬が中学校に入学する。野球が大好きでお互いを尊敬しあっている二人が送る学生生活。

幼くて、不器用で、それでもまっすぐな二人を描きました。

この作品は作者自身が中学生のときに書いたものをもとに修正をくわえたものです。作者自身の処女作であり、投稿初作品です。

少しだけでも多くの方の目にとまれば、と思います。

はじまり。

「私、夢があるんだ。拓馬 たくま は」

「夢って何。でっかい夢。それともすぐその手の届きどうな目標のこと」

「手が届きそうって、目標っていつの」

伊瀬庵 いせ いおり

淡い薄紅色の花弁。ひらひら舞っていた。まるでドラマの一場面のように。臭い舞台が整っていることに私は思わず笑ってしまった。今日は入学式だった。私は大きな桜の木の下にたっている。初めて袖を通した新品のセーラー服はやはりぶかぶかだった。靴も大きめで歩きにくい。歩きたびに足もとを抜けていく風に気分が落ち着かなかった。スカートの丈を目いっぱい長くしてもらったのだが、それでも気に入らなかった。これで私が笑っていたら俳優までそろったということになる。でも生憎の腐れ顔だった。

「庵」

私の顔をふくれっ面にさせている春風に乗って、聞きなれた声が届けらる。

「拓馬」

振り返らずともその声の主はわかっていた。賀川拓馬 かがわたくま もう随分と長い付き合いだ。長いというと笑われるかもしれない。私たちが今日晴れて進学するのは中学校だ。

「そろそろ教室に行ったほうがいいんじゃない。お嬢さん」

「お互いさまでしょ。制服ぶかぶか」

そこでようやく私は笑った気がする。

「それもお互い様だよ」

「女はスカートってだれが決めたんだろう。本当に嫌だな。私生徒

会長にでもなるのかな」

「まだ式も始まってないのに何言ってるんだよ。行くぞ」

歩きざまに私は腕を掴まれた。それに驚いて私は思わず声を荒げた。腕は勿論振り払っていた。

「あつ、わりい」

ばつが悪そうに拓馬がその右手を背中にもわした。

「いや、こつちこそ、ごめん。いきなりだったから驚いて」

ずっと見てきたその姿が顔が征服を来ているというだけでこんなにも気がまえるものなのだろうか。

「つつい、な……行くこうぜ」

「うん」

賀川拓馬

俺が突如見せた顔は強張っていた。俺が俺の笑顔を一瞬でもぎ取ったのだ。その罪悪感に気の利いた言葉のひとつも出てこなかった。

「つつい、な……いこうぜ」

「うん」

相槌がやけに寂しく聞こえて、早くこの場から立ち去りたかった。

「俺、教室まだ確認してないんだ。俺は」

「まだまだよ。見に行こう」

一瞬の出来事をなかつたことにしようとお互い必至だった。始めてみるスカート姿の俺がやけに小さく見えた。中学入学が近付くにつれて俺の表情はだんだんとなくなっていった。それは俺を含めて当時の少年野球チームの同級生全員が感じていた。俺がこの中学校で何を重点的に生活していくのか俺にはわからなかった。共用はけしてできない。だから何も言わないけれど、俺は望んでいた。

またお前と野球がしたい。

俺たちはようや外履きから上履きに履き替えた。自分の下駄箱を探

すことに随分と戸惑った。自分の身長を優に超えるその中から小さな箱に書かれた小さな名前を一つ一つ見ていったのだ。そうして玄関のすぐ目の前に張られていたクラス票に目をやった。

「あっ」

「何」

俺が突き出していた人差し指の上下動が止まった。

「私2組。拓馬1組だ」

「そっか」

「別々、初めてだね」

「なんか変な感じだな」

「私、何の根拠もないんだけど、中学校でも拓馬と同じクラスになるんだとばかり思ってた」

「腐れ縁だからな」

小学校の6年間と小学校3年生からの少年野球時代をずっと一緒に過ごしてきた。幼稚園まで一緒だった。別々の教室に入って行った時とても不思議な感覚だった。

渡り廊下で別々の教室の扉に手をかけて別れる際初めて俺の姿をまじまじと見た気がする。履きなれないスカートからのぞく足は本当に細くて、少年野球時代に鍛えた筋肉が小さくぽっこりとうかんでいるだけだった。細い首から繋がる肩もまた、折れてしまいそうなほど細く見えた。今までだぼだぼの男の子用の私服姿と野球着の姿した記憶になかった。中学にあがったばかりの俺の体が完成しているはずもないが

、それでも圧倒的な体格差があるように思えた。

「なら、またね」

「ああ」

ゆづり。

伊瀬庵

私は呼鈴と同時に教室の戸を開けた。拓馬が別の教室に入っていたのをただ見ていた。そうして時間が過ぎていたらしい。静まり返った教室の空気がやけに重くて一同の視線を浴びた。当たり前だが知らない顔ばかりだ。

「遅いぞ」

「すいません」

それからすぐに口を開いて喝を入れようとすると教員に目をくれることなくひとつだけぽつんとあいていた席に座る。窓際が一番後ろだった。少しだけ気分が浮ついた。グラウンドが一望できた。乾いた土、照りつける光。反射するスコアボード。すべてがなつかしかった。

教員は私の名前を座席表から探して注意を説いた。その慌ただしさに説得力が一気になくなった。私は返事を返さなかった。ファーストコンタクトはこれで最悪だ。それでもいいと思った。教員に好かれるために中学生になったわけではないのだから。ただいつ間にか大きくなって、そうせざるをえなかったのだ。

それだけだ。

教室を見渡してみた。みんな緊張しているのか空気も張りつめていた。この教室だけではないと容易に想像はついた。ただ拓馬のクラスでは幾人かの女子がその存在に気づいて胸をたからせているかもしれない。そんな妄想をしたら勝手に笑っていた。そんなとき、廊下側の真ん中に座る竹内巧たけうちこうと目が合った。手を顔の高さまであげて敬礼のポーズをとる。

（やつほ）口真似をした。

巧は少年野球のチームメイトだ。教員の視線を伺って敬礼を返し

てきた。

体育館に誘導された。

外では桜が満開だがまだ温かいとはいええずストーブがたかかっていた。

着々と時間は進む。あらかじめ用意された儀式を淡々とこなしていく。私たちの仕事といえば、まだ名前も知らない教頭先生の指示に従って立ったり座ったりするだけだ。

「入学生代表挨拶、伊瀬庵」

「はい」

立ち上がる。ここが私だけ唯一他の生徒と違う動きをすることだ。私が壇上になると、同じ小学校出身の者であるうざわつきが聞こえた。このときだけ白けきつた会場がどよめいた。

「春の日差しが暖かく」

綺麗な言葉で昨夜文を羅列した。それを口にしてかたどっていく。挨拶をするんだ。なんてことは誰にも言わなかった。ざわついて当然だろう。私は優等生を演じ切る。でもこんな箱の中に3年間も閉じ込められるのだ。憂鬱のほかなにもなかった。

賀川拓馬

「入学生代表挨拶、伊瀬庵」

欠伸を必死でこらえていた。そんな退屈な時間が一瞬にして変わってしまった。心臓が大きく高鳴った。なにやってんだ。聞いてないぞ。どうなっているんだ。と自分の置かれている環境がわからなくなった。どうにもこうにも、俺はただの新入生の一人にすぎず、俺はいつの間にか優等生の一員だ。周囲を見渡しても俺の姿に目を凝らすものは少ない。

それでも彼女の存在がいち早く知れ渡ったという嫌悪と嫉妬が生

まれた。

俺の知らない俺だった。

どうして何もかも知っているのだと思いついていたのだろうか。

ただ3年間野球をしていただけじゃないか。

俺は誰のものでもないのだ。

俺はどこかで思い込んでいたのかもしれない。

俺は特別な存在で、俺にとっての俺もまた特別なのだと。

だから何も知らされていないことに激しく動揺したのだ。

俺がマイクに向かっていている間中、心臓がばくばくとなっていた。

伊瀬庵

長く感じた儀式が終わり、ようやく教室に戻された。担任の教員が難しい顔をしてこちらを見ていた。さきほど威圧感を放っていたあの女子が挨拶をしていたのか、と。あの数分の出来事で「優等生」と固定観念を焼き付けさせられたのだ。この場にいる生徒も教員も同じだ。

短い休憩を告げられた際に巧が案の定声をかけてきた。会つのは小学校卒業以来で話が弾んだ。他にも何人か友人はいつたが、少年野球時代の仲間との思い出は強すぎた。絆も顕在しているところとだ。巧と話している間、声をかけてくる友人はいなかった。

たくさんの資料が配布された。前から流れてくるその紙を一枚一枚受け取り、ての油分はすっかり奪われてしまった。どれもこれもタイトルにだけ目を通し、ファイルにしまっていく。その中の一枚だけに目がとまった。「入部届」だ。ホツチキスでとめられた2枚つづりでその案内に目を通した。気になるのは野球部の大会成績だ。マネージャーの募集も特に記されていないなかった。ソフトボール部にも目を通した。でもやはり興味がわかなかった。

私はやっぱり野球がしたい。

そのことで頭がいつぱいになった。

誰もが緊張の糸を切った放課後。もう友達ができたものも多く見受けられた。こうやってすぐに新しい環境に順応していくのだ。自分でもわからないメカニズムがあるのかもしれない。私もその中の一人で親しくなったものが数人いた。

部活見学にさっそく行く者、足早に帰路につく者、それぞれだった。その多くが親と行動を共にしていた。巧と巧のお母さんに挨拶をして私は教室に残った。グラウンドを眺めてしまっていた。野球部がグラウンドをめいっぱい使ってキャッチボールをしていた。

田舎だ。グラウンドが広い。ただただうらやんでしまっていた。

練習着姿の先輩を遠くで見える数人の学生服姿があった。入部希望者だろうか。

「庵、行くぞ」

人が数人しか残されていない教室で声をかけられた。

「拓馬、何やってるの。もうあの中にいるものだとばかりに思っていたよ」

グラウンドを指さす。ここからは人の判別は難しい。かろうじて人数が把握できるくらいだ。

「行こうぜ、グラウンド」

「……いかない。もう少しここで考えるよ」

「じゃあ、俺もちよつとだけここで考える」

「は」

拓馬が私の前の席に座った。

懐かしい感じがした。練習が休みな平日の放課後はよくこうやって語り合った。それは主に反省会だった。あの子のあの球が、だとかあのときのあのスイングが、とか。プロ野球中継の話だとか。野球の話ばかりだった。

「挨拶、驚いたよ」

「内緒にしてたからね」

「誰にも」

「そう、誰にも」

「よかったよ」

「ちゃんと聞いてる人なんていたんだ。びっくりだよ」

野球の話意外が久し振りであまく会話を紡いでいくことができなかつた。

「拓馬ってさ、きっと中学でももてるよ」

話のつじつまがむちゃくちゃだ。

「何言ってるんだ」

「頭もいいし、運動神経だっていいし、背も高い。顔も……そこそこ」

「そこそこってなんだよ。それちゃんとほめてっか」

「褒めてるよー」

賀川拓馬

いきなり何を言い出すんだろうと思って、身構えてしまった。それでも俺がふと見せた笑顔に緊張が和らいだ気がする。俺の姿が教室に取り残されていることをみつけてからしばらく動けなかった。なんて声をかければいいのかだろう。

「恋しちゃうかもねー」

「んなことわかんねえだろ」

「いいの、勝手な妄想だから。妄想ってただなんだよ」

グラウンドで広がっている光景に話を戻せなかった。俺の冗談に付き合った。悪い気はしなかった。時計の針はすぐに一周してしまふ。

「あんな、俺」

「なに」

おれの一言でまた俺の顔から笑顔は消えてしまった。

「見るだけ見てみないか」

「……」

「妄想もタダなら見るのもタダだよ。プラスもマイナスもないからしばらくしてゆっくりと首が縦に振られるのを確認した。」

それからどたばたと身支度を済ませる。カバンの中で新しい教科書とプリントがミックスされているのを見てしまった。

「よし、行くぞっ。拓馬、はやくしろよ」

ようやく心からの笑顔を見れた気がした。

少年野球チームを退団してからだから、本当に久しぶりだ。

「迎えに来てやったやつに言うセリフかよ」

「いいの。行くよ、行くよっ」

廊下に駆け出して階段を駆け降りる。「廊下は走らない」のありきたりな張り紙を目にした。

「拓馬、今日ね。ちよつとだけ部活見てから小学校行かない」

「ああ」

「巧達も誘って皆んで行こう。きっと楽しいよね」

「決まりだな」

そんなに悩むな、と言えない自分がいた。

そんなに野球が好きなんだ。続ければいいじゃないか。

自分でも気づいているはずなのに、決断できない庵をずっと見て
いるだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909ba/>

居場所。

2012年1月2日02時50分発行